配布先：山形県政記者クラブ

PRESS RELEASE

令和３年（2021年）9月28日

今この現在から紡ぎ出される
過去から未来へと続くライフストーリー
～「歴史の終わりの幻想」の日米比較～

【本件のポイント】

- 「歴史の終わりの幻想（End of History Illusion: EoHI）」（自分の人生において、過去に起こった変化が、未来に起こると予想される変化よりも大きいと報告する傾向）の大きさは文化的背景によって異なる。
- 人生の満足度とパーソナリティ特性において、アメリカ人も日本人もEoHIを示すが、アメリカ人は日本人よりもEoHIが大きく、過去の自分を否定的に見なす傾向が強い。
- 自尊心と自己概念の明確性はEoHIの大きさを規定する重要な要因であり、文化的背景によりその影響の程度は異なる。

【概要】

山形大学学術研究院の大村一史教授（認知神経科学）は、米国ジョージア大学との国際共同研究により、「歴史の終わりの幻想（End of History Illusion: EoHI）」（自分の人生において、過去に起こった変化が、未来に起こると予想される変化よりも大きいと報告する傾向）の文化差を明らかにしました。公開されているデータセットの分析（研究 1）と独自のオンライン調査（研究 2）により、人生の満足度とパーソナリティ特性における EoHI の大きさをアメリカと日本の比較を通じて検討しました。

研究 1 では、人生の満足度について、アメリカ人は日本人に比べて、未来の変化よりも過去の変化をより大きく報告する傾向が確認されました。また、アメリカ人は過去の自分を現在の自分よりも否定的に見なすのに対し、日本人はより肯定的に見なす傾向がありました。これは、アメリカ人は日本人よりも現在の自分を肯定的に見ようとする動機が高いことによるものであると考えられます。

これらの知見を踏まえた上で、研究 2 では、自尊心（self-esteem）と自己概念の明確性（self-concept clarity）の関連から、パーソナリティ特性における EoHI を検討しました。研究 1 と同様に、アメリカ人は日本人に比べ、EoHI が大きく、過去の自分について否定的に見なす傾向がありました。また、自尊心と自己概念の明確性が EoHI の大きさを規定する重要な要因であり、文化的背景によりその影響の程度が異なることが明らかになりました。ライフストーリー※1 は、人々が時間の流れの中で自分という人間が何者であるかを考える上で大切です。EoHI は、自分が過去に大きく変化し、現在は比較的安定した良い状態にあるというイメージを描き、心の平穏を保つために役立つのでしょう。この EoHI は文化の違いを超えて存在するようですが、アメリカ人は日本人に比べて EoHI を比較的鮮明に思い描くようです。

本研究成果は、心理学分野の国際学術誌 *Personality and Social Psychology Bulletin* 誌に掲載されました。(2021 年 8 月 12 日オンライン版掲載)

お問い合わせ
学術研究院　教授　大村一史（認知神経科学）
TEL　023-628-4439　　メール omura@e.yamagata-u.ac.jp

【背景】

過去の自分を振り返ってみると、あなたにはどのような変化があったでしょうか？またこれからの未来、どのように変化していくと思いますか？過去を思い出したり、未来を想像したりすることができる精神的なタイムトラベルは人間特有の能力ともされています。精神的なタイムトラベルはあくまでも主観的なものであり、しばしば過去と未来に対する誤った認識を犯す可能性は否定できません。そのような誤認の代表例が、「歴史の終わりの幻想（End of History Illusion: EoHI）」と呼ばれる現象です。EoHI とは、自分の人生において、過去に起こった変化が未来に起こると予想される変化よりも大きいと報告する傾向のことです。人間は、未来を思い描く時に、過去ほどの変化は起きないだろうと考えがちです。そして、過去と未来を隔てる分水嶺として、「今この現在」が存在すると考えるものです。EoHI は人生の満足度やパーソナリティ特性など幅広い心理領域で起こります。EoHI が起こる理由の一つは、「自分は現在、人生の中で比較的良い状態にあり、今後もそうであり続けるだろう」という考えを強めるためだと考えられています。継時的自己評価理論[※2] では、現在の自己概念を維持または強化するために、過去の自分を低く見なす傾向があると説明されます。「現在の自分は過去の自分と比べて大きく成長した」という信念を維持するために、EoHI が起こっているのかもしれません。

これまで EoHI に関する実証的な研究は、WEIRD[※3] 文化圏中心に行われてきました。そこで、本研究は、EoHI の大きさが、2 つの異なる文化的背景（アメリカ人と日本人）の間で異なるかどうかを調べました。米国と日本を選んだ理由は、EoHI の感受性に関連していると思われる構成要素、「時間的志向性」[※4] と自分自身についての考え方である「自尊心」[※5] と「自己概念の明確性」[※6]、が異なる二つの文化だからです。時間志向性について、WEIRD の文化的背景を持つアメリカ人は現在の一瞬の状態に焦点をあてる傾向があり、日本人は過去から未来へと続く時間的な流れの文脈を重視する傾向があるとされています。自尊心については、WEIRD 文化圏のアメリカ人は、現在の肯定的な自己評価を維持または高めるために、過去の自分を低く見積もる傾向が報告されています。一方、アメリカ人と比較して、日本人は自尊心が低い傾向があることが示されています。アメリカ人と日本人とでは、自己強化[※7] の動機が異なる傾向があり、アメリカ人は日本人よりも、「現在の自分は過去の自分と比べて成長した」という信念を持ち自尊心を高めたい動機が強いため、EoHI が大きいと考えられます。また、自分のことをよく理解しているという自己概念の明確性が高ければ、「現在の自分はしっかりとした基盤の上に立っていて、これからも安定した状態を保つことができる」と考えるため、未来の変化を低く見積もることになり、結果として EoHI は大きくなるであろうと考えられます。この自己概念の明確性も、アメリカ人と比較して、日本人は低い傾向が報告されています。

【研究手法・研究成果】

インターネット上に公開されているデータセットの分析（研究 1）とクラウドソーシングサービスを利用したオンライン調査（研究 2）により、人生の満足度とパーソナリティ特性における EoHI の大きさを、時間的志向性と自尊心・自己概念の明確性が異なる二つの文化的背景（アメリカ人と日本人）の比較を通じて検討しました。

研究 1 では、米国の中年期（Midlife in the United States: MIDUS）と日本の中年期（Midlife in Japan: MIDJA）の心理社会特性・メンタルヘルス・健康に関する大規模研究から得られたデータセットを使用しました（Institute for Social Research at the University of Michigan [www.icpsr.umich.edu] からダウンロード可）。平均年齢が極力等しくなるように、MIDUS の Wave 2（3,987 名、うち女性 2,205 名、平均年齢 56.15 歳）と MIDJS の Wave 1（1,027 名、うち女性 522 名、平均年齢 54.36 歳）を用い、現在の人生満足度、10 年前の人生満足度（過去）、10 年後の人生満足度（未来）、および自尊心を分析項目として絞り込みました。[過去の変化の報告値＝現在の人生満足度－10 年前の人生満足度]、[未来の変化の予想値＝10 年後の人生満足度－現在の人生満足度]、[EoHI＝10 年前の人生満足度－10 年後の人生満足度]、と操作的に定義しました。これらに対して、年齢と性別を共変量とした混合モデル共分散分析から日米比較を行いました。その結果、アメリカ人は日本人と比べて、人生の満足度において、未来の変化よりも過去の変化をより大きく報告する（EoHI が大きい）傾向がありました。次に、自尊心と EoHI の大きさとの関連を検討するために、重回帰分析およびパス解析を実施したところ、アメリカ人は自尊心が高いほど、EoHI が大きいことがわかりました。一方、日本人ではそのような傾向は認められませんでした。研究 1 では、人生の満足度における EoHI の大きさには文化的な違いがあり、アメリカ人は日本人に比べて EoHI が大きく、自尊心がその大きさに影響していることが明らかになりました。また、アメリカ人は現在の自分よりも過去の自分を否定的に見なすのに対し、日本人は過去の自分をより肯定的に見なす傾向がありました。これはアメリカ人が日本人よりも自己評価を高めようとする自己強化動機が強い傾向があるためであろうと考えられます。このように EoHI が文化的背景によって異なる理由の一つは、現在の自分を肯定的に見ようとする動機の違いによるものであると考えられます。

研究 2 では、研究 1 で得られた知見をもとに、パーソナリティ特性における EoHI をクラウドソーシングサービスを利用したオンライン調査により、アメリカおよび日本からデータを収集しました。最終的に、アメリカ人

815 名（うち女性 301 名、平均年齢 36.27 歳）および日本人 794 名（うち女性 368 名、平均年齢 40.13 歳）を分析対象としました。パーソナリティ特性のビッグファイブ※8 を 10 項目で測定できる Ten Item Personality Inventory（TIPI）を用い、現在の自分、10 年前の自分（過去）、および 10 年後の自分（未来）を評価・想像しました。また、10 項目からなる自尊心尺度、12 項目からなる自己概念の明確性尺度にも記入を求めました。研究 1 と同様に、[過去の変化の報告値＝現在の TIPI－10 年前の TIPI]、[未来の変化の予想値＝10 年後の TIPI－現在の TIPI]、[EoHI＝10 年前の TIPI－10 年後の TIPI]、と操作的に定義しました。混合モデル共分散分析を用いて、文化差を検討したところ、アメリカ人は日本人に比べて、自分のパーソナリティ特性について、予想される未来の変化よりも過去の変化をより大きく報告する（EoHI が大きい）傾向がありました。次に、自尊心・自己概念の明確性と EoHI の大きさとの関連を検討するために、重回帰分析およびパス解析を実施したところ、アメリカ人は自尊心・自己概念の明確性が高いほど、EoHI が大きくなる傾向が認められました。日本人では自己概念の明確性にのみこの傾向が見られました。また、アメリカ人は過去の自分を現在の自分よりも否定的に見なす傾向があり、日本人は過去の自分を現在の自分と同じように見なす傾向がありました。さらに日本人はアメリカ人よりも、未来の自分を現在の自分よりも肯定的に評価する傾向が高いこともわかりました。また自己概念の明確性が高いほど、未来の自分の変化を小さく予想する傾向があり、アメリカ人はこの傾向が強いようです。自尊心が高いと EoHI が大きくなる理由は、「現在の自分は過去の自分と比べて成長した」と自己評価を高めようとする自己強化動機、自己概念の明確性が高いと EoHI が大きくなる理由は、「自分のことをよく知っていて、今後も自分は変わらない」という信念を維持したいという動機にもとづくものと推察されます。このようにパーソナリティ特性における EoHI も文化的背景によって異なることが明らかになりました。

【今後の展望】

ライフストーリーは、人々が時間の流れの中で自分という人間が何者であるかを考える上で大切です。EoHI の理解を深めることによって、人生の節目に直面する様々な選択における意思決定をよりよいものにできる可能性があります。EoHI は、自分が過去に大きく変化し、現在は比較的安定した良い状態にあるというイメージを描き、心の平穏を保つために役立つのでしょう。EoHI は文化の違いを超えて存在するようですが、アメリカ人は日本人に比べて EoHI を比較的鮮明に思い描くようです。未来への道筋が明瞭に見通せない現在のコロナ禍のような状況においても、まず自分自身の「今この現在」を歪み無く認識し、確かな未来への変化を想像し、あなただけのライフストーリーを紡いでいくことが大切であろうと思われます。未来の自分は現在の自分が思っている以上に変わっていくものなのです。そして、過去の見え方にもこれまでとは違った変化が訪れるかもしれません。特に、過去－現在－未来と続いていく時間の流れの中で物事を全体的に捉える日本人特有の考え方は、明るい未来を切り拓いていくヒントを与えてくれるのではないでしょうか。さらに知見を積み重ねていくことで、新しい時代を生きていく人間の可能性の理解に役立つことが期待されます。

【論文情報】

題名：Cultural Differences in Susceptibility to the End of History Illusion
著者：Brian W. Haas and Kazufumi Omura
掲載誌：*Personality and Social Psychology Bulletin,* August 12, 2021, 1461672211036873. 2021 年 8 月 12 日オンライン掲載
DOI：https://doi.org/10.1177/01461672211036873

※用語解説

1. ライフストーリー：個人の人生・生活・生き方についての生涯にわたる自分だけの物語
2. 継時的自己評価理論：過去や未来の自分との比較において、現在の自己評価を高く保つために、過去や未来の自分を歪めて評価するメカニズムがあることを提唱する理論
3. WEIRD：「Western（西洋の）」「Educated（教育を受けた）」「Industrialized（工業化した）」「Rich（裕福な）」「Democratic societies（民主主義社会の）」の頭文字をとったもので、この言葉に象徴されるような属性
4. 時間的志向性：ある時点における個人の心理的な過去および未来についての見解
5. 自尊心：自分に対する肯定的な態度や価値の感情
6. 自己概念の明確性：自分についての考え方や信念が明瞭に確信を持って感じられる程度を表す概念
7. 自己強化：自分の行動を強めたり、維持したりすることで、自分の評価を高めようとする現象
8. ビッグファイブ：基本的なパーソナリティ特性の次元を 5 つの因子（外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性）に収束させて記述する理論